

小児がん 亡き娘から学んで



中学校で講演する鈴木中人さん＝NPO法人「いのちをバトンタッチする会」提供

体験語る父、中学生向け副教材

小児がんで亡くなった娘の物語から病気を知り、命の大切さを学んでほしい。そう考えた名古屋市のNPO法人代表、鈴木中人さん(58)が、教育学者や医師らと小児がんの副教材づくりを進めている。4月から希望する全国の中学校に無料で配布する予定だ。

景子さん＝鈴木中人さん提供



鈴木さんの長女、景子さんは3歳のときに発症して入院。1995年、6歳で亡くなった。6歳の誕生日に「せめて一度花

嫁姿を」と、母親が買ってきたウェディングドレスを着て記念撮影した写真が遺影となった。娘から託された「バトン」として命の大切さを伝えたいと、

2007年にNPO法人「いのちをバトンタッチする会」を設立。学校や企業で千回以上、延べ約20万人に、自らの体験を講演してきた。

そんななか、文部科学省の有識者会議が昨年、学校で子どもががんを学び、健康と命の大切さを考えられる教育を、と提言した。「これまでは学校で命は語れても、死を思わせるがんを説明することは難しかった」と鈴木さん。がんを正面から扱う

好機だと、教育学者や教育委員会の指導主事、医師、元校長らに協力を仰ぎ、冊子やDVDをつくり始めた。テキストでは小児がんについて「毎年約2500人の子どもの発病」「70〜80%は治る病気」と紹介し、景子さんとも一緒に、病気を克服した子どもたちの話も掲載。命とは何かを問いかける構成にしたという。

「先生方にも家族を失った体験があるはず。命を大切に思う自身の心をのせて生徒に語りかけてほしい」と鈴木さん。道徳や保健体育、総合的な学習の時間で使ってもらいたいという。

副教材は冊子と指導案、DVDのセットで、いのちをバトンタッチする会と、小児がんの子どもを支援するNPO法人「ゴールドリボン・ネットワーク」の共同発行。2万セットを用意するほか、バトンタッチする会のサイトからもダウンロードできるようにする。問い合わせは同会(052・581・8668)へ。(氏岡真弓)